図版1　河野浅八《静寂》1929（昭和4）年頃、26.5×33.8cm
Asahachi Kono, *Serenity,* ca. 1929

図版2　河野浅八《無益な猛り》1932（昭和7）年、26.3×33.7cm
Asahachi Kono, *Futile Rage,* 1932

図版3　福山秀治《ミルク瓶のふた》1930-35（昭和5-10）年頃、26.7×34.2cm
Hideharu Fukuyama, *Milk Tops,* ca. 1930-35

図版4　福山秀治「題名不詳」1930-35（昭和5-10）年頃、25.5×32.5cm
Hideharu Fukuyama, Title unknown, ca. 1930-35

図版1～4はすべて、ゼラチン・シルバー・プリント、横浜美術館蔵（荒木田愛彦氏寄贈）
All works in this page : gelatin silver print, Yokohama Museum of Art（donated by Mr. Arakida Yoshihiko）

【研究ノート】
1920-40年代の在米日本人写真家たちに関する基礎調査
―日本人カメラ・ピクトリアリスト・オブ・カリフォルニアに関する概要と年表

大澤 紗蓉子

はじめに

横浜美術館では、第二次世界大戦前にアメリカ西海岸に渡り、移民として暮らしながら写真家として芸術写真を制作したふたりの人物の作品を2018(平成30)年度に受贈した。ひとりめは河野浅八(1876-1943)、ふたりめは福山秀治(1905-78)である[1]。いずれの作家の作品も、かつて日本郵船が保有した横浜・サンフランシスコ間を結ぶ貨客船・秩父丸などで船長を務めた荒木田良亮氏が所蔵していたものだ。

河野は、1896(明治29)年に単身渡米し、主にロサンゼルスを拠点に活動した写真家である。欧米のピクトリアリズムに影響を受け、1920年代中頃よりロサンゼルスおよび欧米各地の写真サロンで作品を発表した[2]。1934(昭和9)年、58歳のときに郷里の熊本県宇土郡大見村(現・宇城市不知火町大見)に帰国し、以降は後進の育成に務めたとされる[3]。国内においては、河野の死後に旧生家で1,500枚におよぶネガアルバムと68点のプリントが発見され、この作品・資料群は現在、宇城市不知火美術館の所蔵となっている[4]。また、東京都写真美術館には河野のプリント53点が収蔵されている。

一方の福山については、現在のところ多くのことが分かっていない。クリーブランド州立大学の教授で、写真家でもあった日系アメリカ人マスミ・ハヤシの研究によると、福山は1905(明治38)年に日本で生まれているが、生地や渡米時期は不明。1942(昭和17)年2月19日の大統領行政命令9066(Executive Order 9066)の発布にともない、家族とともにヒラ・リバー戦争移住センターに収容される。そして経緯は不明だが、同センターの公式写真家として活動。戦後はロサンゼルスに戻り、73歳のときに同地で没している[5]。これまでのところ、日本の公立美術館に福山の収蔵作品はなく、当館に寄贈された2点は極めて貴重な作例といえる。

ここまでが、2018(平成30)年時点の作品調査において、ほんのわずかに知り得た情報をまとめたものである。福山については、彼がアメリカで市民権を得たのかさえ不明であるが、当館では同地で没した経緯にもとづき、外国人作家として作品登録している。その後、この河野・福山両名に焦点をあて、国内外の先行研究を調べていくうちに、ふたりの共通点がみえてきた。それは、両者がともにカリフォルニア州ロサンゼルスのリトル・トーキョー近郊に暮らしていたこと[6]。そして、同地で結成された日本人の写真家クラブ「日本人カメラ・ピクトリアリスト・オブ・カリフォルニア(Japanese Camera Pictorialists of California)」(以下「JCPC」)[7]の周辺で活動していたということである。とくに後者については、2016(平成28)年にロサンゼルスの全米日系人博物館(Japanese American National Museum)で開催された展覧会「Making Waves: Japanese American Photography, 1920-1940」のカタログに河野に関する記述があること、掲載された同クラブの集合写真のなか

挿図1　撮影者不詳「河野浅八」1930(昭和5)年頃、コウノ・ファミリー・コレクション(『Making Waves: Japanese American Photography, 1920-1940』p.3より引用)

挿図2　佐多忠直「日本人カメラ・ピクトリアリスト・オブ・カリフォルニア集合写真」1930年代、サタ・ファミリー・コレクション(『Making Waves: Japanese American Photography, 1920-1940』p.15より引用)
写真後列右端の人物が福山秀治。マスミ・ハヤシのウェブサイトに掲載された福山の家族写真に写る男性と同一人物と判断できる

に福山の姿が確認できたことで判明した(挿図1、2)。

この展覧会は、ロサンゼルス・ヴァリー・カレッジ名誉教授で、写真史家のデニス・リード(Dennis Reed)によって企画されたもので、JCPCや、同時期にシアトルで結成されていた「シアトル・カメラ・クラブ(Seattle Camera Club)」に所属した写真家らを中心に、戦前に国際サロンで芸術写真を発表した在米日本人の作品とプロフィールを数多く紹介している(残念ながら福山の作品・プロフィールは掲載されていない)[8]。

また、河野の国際サロンでの活躍はよく知られているが、本稿執筆時点までに調べがついた限りでは、福山については、最も早い時期で1931(昭和6)年に全日本写真連盟が主催した「第5回国際写真サロン」のカタログのなかで、入選作品《歸家》[9]および漢字名「福山秀治」が確認された(挿図3)。また、シアトル・カメラ・クラブの創設者のひとりで、医師・俳人・写真家であった小池晩人(本名・小池恭)の遺品からなるワシントン大学図書館の「Kyo Koike Photograph Collection」のなかに、福山が1937(昭和12)年に撮影した同クラブメンバーの集合写真があることも判明した[10]。

いずれにしても、福山についてはまだ不明な点が多く、引き続きの調査が必要である。以上の経緯を記したうえ、本稿では河野、そして福山を知るための基礎的な資料と

挿図3　福山秀治《歸家》1931(昭和6)年頃、所在不明(『第5回国際写真サロン』p.189より引用)

なるよう、デニス・リードによる展覧会カタログ『Making Waves: Japanese American Photography, 1920-1940』を主要参考文献とし、ふたりの活動をつなぐJCPCの動向を概観する年表を作成する。そのうえで、今後おこなうべき調査や検討すべき課題を記載したい。

日本人カメラ・ピクトリアリスト・オブ・カリフォルニアの概要と年表(設立から解散まで)

アメリカ合衆国国務省の「移民統計報告」によると、最初にアメリカ国内で記録された日本人の移民は、1861(文久元)年1月〜3月にサンフランシスコに上陸した20〜25歳の男性召使いであったという。その後、1869(明治2)年に会津藩士40名が明治政府公認のもと、カリフォルニア州エルドラド郡ゴールドヒルに入植し、農場建設を計画するが挫折。1874(明治7)年には、カリフォルニア州に男子67名、女子8名、幼児4名の日本人がいたとされる。やがて日本国内では、出稼ぎを目的とする労働者と、新興国アメリカで新しい知識や技術を習得しようとする学生らによる渡航熱が高まり、若い独身男性を中心にハワイやアメリカ西海岸地域への移住者が増加する。そして1920(大正9)年には、およそ2万人の日本人がロサンゼルスのリトル・トーキョー近郊に暮らしていたとされる。

そのリトル・トーキョーで日本人向けに発行されたのが、現在まで続く新聞『羅府新報(Rafu Shimpo)』である(1903年創刊)。1920年代初頭、同紙の宣伝部長であり写真家の進藤虎龍(Thomas Koryu Shindo)は、アメリカ西海岸地域に暮らすアマチュア写真家のためのコンペティションおよび展覧会を立案。1924(大正13)年には、羅府新報主催による初のコンペティションおよび写真展が実現する。この展覧会において、河野浅八が《Evening Breeze》で副賞を受賞。こうした一連の動向がリトル・トーキョー近郊に暮らす芸術写真家たちを刺激し、羅府新報主催の展覧会に出品した写真家を中心に、1926(大正15/昭和元)年、JCPCの前身が組織される。

JCPCは、1926(大正15/昭和元)年に、ロサンゼルスのリトル・トーキョーで「日本人カメラ・クラブ・オブ・ロサンゼルス(Japanese Camera Club of Los Angeles)」という名称で結成された。創設メンバーは、当地の写真家コミュニティで指導的立場にあった下島勝信(Kaye Shimojima)を中心に、時計店を営む板野利藻(Riso Itano)、商業写真館を経営していた泉尾榮實(Shigemi Izuo)、乾物商であった木村久雄(Hisao E. Kimura)、清掃員をしながら写真家としても活動していた前田寅二(Toraji Maeda)、自動車のセールスマンであり庭師でもあった向井タクジ(Takuji Mukai)、食品製造業に携わっていた中村憲太郎(Kentaro Nakamura)、リトル・トーキョーにあった岩田美術店(T. Iwata Art Store)で働いていた佐多忠直(James Tadanao Sata)らであった。結成にあたっては進藤虎龍がロゴをデザインし、翌1927(昭和2)年には名称をJCPCに変更する(進藤は1928年に正式に会員となる)。現在確認されている限りでは1940(昭和15)年までの15年間に、原則として年に一度、会員らによる展覧会を実施し、カタログを発行した。

以下の年表では、①JCPC、およびリトル・トーキョー近郊で活動した日本人写真家の動向と、②参考用に日本・欧米の社会および写真・美術界のごくわずかな事項を記した。また、横浜美術館が所蔵する在米日本人写真家の作品で判明している事項を記載した。

年	JCPCおよびその周辺	社会、写真・美術界
1903 明治36	■南カリフォルニア大学の学生・山口正治、渋谷清次郎、飯島敬一郎が『羅府新報』を創刊	■1月　アルフレッド・スティーグリッツ『カメラ・ワーク』創刊(1917年休刊)
1913 大正2	■8月　写真家タイゾウ・カトウ(Taizo Kato)の作品《A Spring Outing》がアメリカの雑誌『Photo-Era』(vol. XXXI, no. 2, August 1913)に掲載され、3等賞を受賞する。ロサンゼルスに住む日本人写真家の芸術写真が雑誌に掲載された最も早い事例	
1914 大正3	■のちに羅府新報主催のコンペティションで審査員を務める写真家マーガレット・マーザー(Margrethe Mather)が、エドワード・ウェストンらとともに「カメラ・ピクトリアリスト・オブ・ロサンゼルス(Camera Pictorialists of Los Angeles)」を結成	■ピューリッツァー賞設立
1915 大正4	■下津佐正志がカリフォルニア州サンディエゴに写真スタジオを構える	
1916 大正5	■のちにシアトル・カメラ・クラブを創設する小池晩人がシアトルに移住	
1918 大正7	■写真家アーサー・F・ケールズ(Arthur F. Kales)がカメラ・ピクトリアリスト・オブ・ロサンゼルスに参加。マーザー、ウェストン、ケールズらは、のちにJCPCを結成する写真家や宮武東洋らと交流する。この年から始まった同会主催の国際サロンでは、在米日本人の写真もしばしば入選した ■写真家ハリー・K・シゲタ(重田欣二)がリトル・トーキョーに写真館および写真学校を開設。のちに宮武東洋が学生となる ■この頃までに進藤虎龍が『羅府新報』の宣伝部長になる	■3月　中山岩太が東京美術学校臨時写真科を卒業(第1期生)。翌年ニューヨークで写真館経営に携わる(1926年渡仏、1929年帰国) ■11月11日　第一次世界大戦終結
1920 大正9	■クレランス・H・ホワイト、ゲルトルード・ケゼビアーらによる「ピクトリアル・フォトグラファー・オブ・アメリカ(Pictorial Photographers of America)」が雑誌『Pictorial Photography in America』を発行(1929年まで)。Vol.4(1926年)とVol.5(1929年)には板野利藻らJCPC会員の写真が掲載される	
1921 大正10	■『世界写真年鑑(Photograms of the Year)』1921年版にタイゾウ・カトウの作品《Sunlight and Shadow》が掲載される(Plate. XLI)	■4月　高桑勝雄ら『カメラ』(アルス)創刊 ■中山岩太と鈴木らかんがニューヨークで「ラカン・スタジオ(Laquan Studio)」を設立
1922 大正11		■日本人芸術家が主催するアメリカで初めての展覧会がニューヨークで開催(主催：Japanese Artists Society of New York)。国吉康雄、清水登之らが出品。次いでサンフランシスコでも日本人芸術家らの展覧会が開催される。のちに赫土社を結成するトキオ・ウエヤマ(Tokio Ueyama)、小圃千浦らが出品
1923 大正12	■下島勝信ら、のちにJCPCを結成するメンバーの会合が始まる ■画家トキオ・ウエヤマらがリトル・トーキョーで赫土社(shaku-do-sha)を結成。写真家タイゾウ・カトウや宮武東洋も参加 ■9月　宮武東洋がリトル・トーキョーにスタジオを構える。宮武はJCPC会員にはならなかったが、会員外として1926年以降の展覧会に出品した ■『世界写真年鑑』1923年版に在米日本人写真家による作品が2点掲載される[11]。同書にアーサー・ケールズがアメリカ西海岸の芸術写真家の動向に関する文章を寄稿。そのなかで、当地で活動する日本人写真家を紹介する(ケールズは亡くなる1936年版まで文章を寄せ、ほぼ毎回日本人写真家らについても記述した)	■9月1日　関東大震災

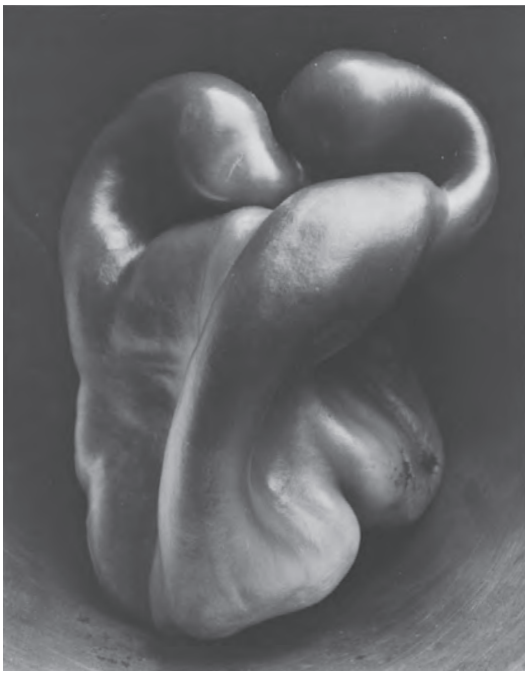
年	JCPCおよびその周辺	社会、写真・美術界
1924 大正13	■羅府新報主催によるコンペティション形式の写真展が初めて開催される。ロサンゼルスやサンフランシスコ近郊に住む写真家らの作品が入選。大賞はサンフランシスコの写真家、副賞は河野浅八《Evening Breeze》。同展カタログとして『アートグラム』刊行[12]。進藤虎龍のほか、下島勝信ら、のちのJCPCメンバーの作品も複数入選。審査員はマーガレット・マーザー、アーサー・ケールズのほか、カメラ・ピクトリアリスト・オブ・ロサンゼルスに所属していたウィル・コネル(Will Connell)、フレッド・アーチャー(Fred Archer)が務めた ■小池晩人、写真家の吉良弘(Hiromu Kira)らがシアトル・カメラ・クラブを創設。会報誌『Notan』刊行 ■ハリー・K・重田がリトル・トーキョーのスタジオを閉店しシカゴに移住 ■タイゾウ・カトウが36歳で死去 ■『世界写真年鑑』1924年版において、イギリスの写真家兼批評家F・C・ティルニー(F. C. Tilney)が同誌に掲載された日本人(在米日本人ではない)の写真について、欧米人の感覚に合うかどうかを基準に作品を評価する文章を寄せる[13]	■3月　木村専一ら『フォトタイムス』(フォトタイムス社)創刊 ■福原信三が「日本写真会」を創設。下島勝信は1929年の帰国後に会員となり、同会とJCPCをつなぐ役割を担う
1925 大正14	■3月　小池晩人がF・C・ティルニーの『世界写真年鑑』1924年版での批判を引用しつつ、日本人写真家の制作態度に関する文章をアメリカの雑誌『Camera Craft』(XXXII, no. 3, March 1925)に寄稿[14] ■9月25日　第1回コダック懸賞(Kodak Contest)で写真家シゲミ・ウエダ(Shigemi Uyeda)が1等を受賞 ■8月　エドワード・ウェストンがリトル・トーキョーでの初個展を開催(主催：赫土社)。ウェストンのリトル・トーキョーでの3回の個展開催には宮武東洋が赫土社会員として尽力する ■『世界写真年鑑』1925年版に下島勝信の作品《Design Japonica》が掲載される(Plate. XVI)	■3月　普通選挙法成立 ■4月　治安維持法成立 ■ラースロー・モホイ＝ナギ『絵画・写真・映画』刊行
1926 大正15 昭和元	■2月　『羅府新報』英語版の発行開始 ■JCPCの前身となる日本人カメラ・クラブ・オブ・ロサンゼルスが結成される。会員らによる展覧会を開催(開催日不明) ■羅府新報主催のコンペティション展開催。『アートグラム』刊行 ■吉良弘がシアトルからロサンゼルスに移住 ■宮武東洋が羅府新報の契約カメラマンになる ■『世界写真年鑑』1926年版に在米日本人写真家による作品が6点掲載される	■『アサヒカメラ』創刊 ■沖田定之助が『アサヒカメラ』10月号の「芸術写真の新傾向」においてモホイ＝ナギ『絵画・写真・映画』を紹介
1927 昭和2	■5月　全日本写真連盟主催「第1回国際写真サロン」開催。朝日新聞社が発行した同展カタログに、在米日本人写真家による作品が14点掲載される[15] ■7月　エドワード・ウェストンのリトル・トーキョーでの2回目の個展開催(主催：赫土社) ■日本人カメラ・クラブ・オブ・ロサンゼルスが日本人カメラ・ピクトリアリスト・オブ・カリフォルニアに改名 ■9月10日～18日　JCPC展。同展に出品された下島勝信《埃の小道》と同じイメージのプリントを東京都写真美術館が所蔵している(実際に出品されたプリントかは未確認) ■12月　F・C・ティルニーが日本人の写真表現に対する批判を再び雑 誌『American Photography』(vol. XXI, no.12, December 1927)に寄せる ■下津佐正志《婦人》がシアトル・カメラ・クラブの展覧会に、《瞑想》がフランスのベトゥーン国際写真サロン(Salon International D'Art Photographique Béthune)に入選 ■この頃、下津佐正志が帰国 ■『世界写真年鑑』1927年版に在米日本人写真家による作品が9点掲載される。アーサー・ケールズが寄稿文のなかで羅府新報のコンペティションやJCPCの活動を指すと思われる在米日本人の活動について記述する	

年	JCPCおよびその周辺	社会、写真・美術界
1928 昭和3	■5月　全日本写真連盟主催「第2回国際写真サロン」開催。同展カタログには、JCPC会員12名含む在米日本人の作品が19点掲載される ■7月21日〜29日　JCPC展 ■8月　吉良弘がアメリカの雑誌『Camera Craft』(vol.XXXV, no.8, August 1928)にエッセイ「Still Life Photography」を寄稿 ■9月　小池晩人がF・C・ティルニーの批判に応答する文章をアメリカの雑誌『Photo-era Magazine』(vol. LXI, no.3, September 1928)などに寄稿 ■『世界写真年鑑』1928年版に在米日本人写真家による作品が9点掲載される。アーサー・ケールズが寄稿文のなかでロサンゼルス近郊の日本人写真家たちがここ数年でもっとも革新的な芸術写真を発表していると記す	
1929 昭和4	■下島勝信が帰国。東京にスタジオを構える ■3月23日〜4月22日　河野浅八《静寂》(図版1)が「第16回ピッツバーグサロン」に入選(同一イメージのプリントを宇城市不知火美術館が所蔵) ■5月〜6月　全日本写真連盟主催「第3回国際写真サロン」開催。同展カタログにはJCPC会員12名含む在米日本人の作品が19点掲載される ■7月21日〜28日　JCPC展 ■8月　『日本写真会会報　光と其諧調』(第7巻1号)において、下島勝信が福原信三の推薦で同会同人となる ■9月　下島勝信が『日本写真会会報　光と其諧調』(第7巻3号)より「欧米写真芸術界鳥瞰」の連載を開始(全6回／第7巻3号〜5号、第8巻1号〜2号、4号) ■9月頃　ダンサー伊藤道郎がロサンゼルスに居を構える。宮武東洋が伊藤の専属カメラマンとなる ■10月　シアトル・カメラ・クラブが解散 ■12月　『日本写真年鑑　昭和3-4年』第5年版に下島勝信の作品《トルコの女》が掲載される ■『世界写真年鑑』1929年版に在米日本人写真家による作品が6点掲載される	■5月　シュトゥットガルトで「映画と写真国際展」開催。モホイ＝ナギ、マン・レイ、アレクサンダー・ロトチェンコ、エドワード・ウェストンらの作品を展示(31年日本巡回) ■9月　世界恐慌
1930 昭和5	■5月〜6月　全日本写真連盟主催「第4回国際写真サロン」開催。同展カタログにはJCPC会員7名含む在米日本人の作品が13点掲載される ■7月1日〜15日　JCPC展。この年の展示には、福原信三、福原路草、下島勝信ら、日本在住の写真家24名の作品40点も出品。ロサンゼルスで初めて日本在住の芸術写真家の作品が展覧される ■12月　『日本写真年鑑　昭和4-5年』第6年版に下島勝信の作品《ジプシー》が掲載される ■日本写真会主催「First International Invitation Salon」が日本で開催。中川奏(Susumu Nakagawa)や下津佐正志のほか、JCPC会員の前田寅二、進藤虎龍らが出品 ■福原信三編『Cameragraphs of the Year 1930』(日本写真会)に板野利藻、木村久雄の作品が掲載。両名は同会員として記述される ■『世界写真年鑑』1930年版に在米日本人写真家による作品が3点掲載される(進藤虎龍の作品《Still Life》が掲載されているが活動地はJapanとなっている)	■中山岩太らが「芦屋カメラクラブ」を創設。フォトグラムやモンタージュなどヨーロッパの前衛表現を導入し始める ■11月　新興写真研究会発足。機関紙『新興写真研究会』刊行

年	JCPCおよびその周辺	社会、写真・美術界
1931 昭和6	■カメラ・ピクトリアリスト・オブ・ロサンゼルスが国際サロンにあわせて発行した『The Pictorialist』1931年版に河野浅八《絶えざる動き》が掲載される(同一イメージのプリントを宇城市不知火美術館、東京都写真美術館が所蔵) ■5月〜6月　全日本写真連盟主催「第5回国際写真サロン」開催。同展カタログにはJCPC会員9名含む在米日本人の作品が14点掲載される ■6月　『日本写真会会報　光と其諧調』(第10巻6号)にJCPC会員進藤、泉尾、加藤らの集合写真が掲載され、日本写真会の在米会員として紹介される ■9月20〜27日　JCPC展。この年の展示には、福原信三、福原路草、下島勝信ら、日本在住の写真家40名の作品が出品される ■10月16日　イギリスの写真家で批評家のハーバート・ランバート(Herbert Lambert)が英国王立写真協会(Royal Photographic Society)で、F・C・ティルニーが日本人の批判に使った「stunt」という言葉の意味を問うディスカッションを行う。このなかで河野浅八《池の幻想》が作例として言及される(同一イメージのプリントを宇城市不知火美術館、東京都写真美術館が所蔵) ■11月　エドワード・ウェストンのリトル・トーキョーでの3回目(最後)の個展開催(主催：赫土社)。ペッパーを写した一連の作品が出品される(挿図4)。息子チャンドラーとブレットも出品。11月7日付『羅府新報』によれば東京と大阪にも巡回したとされる ■12月　『日本写真年鑑　昭和5-6年』第7年版に下島勝信の作品《ヂプシーの占ト者》が掲載される ■『世界写真年鑑』1931年版に在米日本人写真家による作品が5点掲載される(下島勝信の作品《Conversation》も掲載される)	■ヴァルター・ベンヤミン「写真小史」連載開始 ■4月13日〜22日　朝日新聞社主催「ドイツ国際移動写真展」開催。これにより日本国内で新即物主義やヨーロッパ前衛美術に影響を受けた「新興写真」が盛んになる
1932 昭和7	■カメラ・ピクトリアリスト・オブ・ロサンゼルスが国際サロンにあわせて『The Pictorialist』1932年版を刊行 ■5月〜6月　全日本写真連盟主催「第6回国際写真サロン」開催(カタログ未確認) ■12月　『日本写真年鑑　昭和6-7年』第8年版に下島勝信の作品《トンネル風景》掲載 ■河野浅八《無益な猛り》(図版2)撮影(同一イメージのプリントを宇城市不知火美術館が所蔵) ■JCPC展開催有無不明 ■福山秀治がコダック懸賞を受賞 ■『世界写真年鑑』1932年版に在米日本人写真家による作品が4点掲載される。アーサー・ケールズが寄稿文のなかで、アメリカ人、日本人を問わず、西海岸地域のサロンに以前ほど特筆事項がなく、新鮮味がなくなってきたと記す	■7月30日〜8月14日　ロサンゼルスオリンピック ■エドワード・ウェストン、アンセル・アダムス、イモージェン・カニンガムら「f/64」結成 ■中山岩太、木村伊兵衛、野島康三らが写真雑誌『光画』創刊
1933 昭和8	■日付不明　『羅府新報』英語版が「London Salon Honors Nine Photo Artists of Lil'Tokio」や「Paris Photo Salon Choose Local Camera Art Works: Eighteen Prints Out of 559 Are Angeleno Japanese」といった記事を掲載。在米日本人写真家の活躍を伝える ■JCPC展開催有無不明 ■『世界写真年鑑』1933年版に在米日本人写真家による作品が2点掲載される。アーサー・ケールズが寄稿文のなかで日本人以外いずれのクラブもスランプに陥っていると記述	■3月　日本が国際連盟を脱退 ■7月　名取洋之助、木村伊兵衛、原弘、伊奈信男、岡田桑三が「日本工房」設立

年	JCPCおよびその周辺	社会、写真・美術界
1934 昭和9	■1月　『日本写真年鑑　1932-33』昭和9年版に下島勝信の作品《寒村風景》(1930年撮影)掲載 ■河野浅八が帰国 ■5月　河野浅八の作品展が郷里で開催される[16] ■10月　全日本写真連盟主催「第7回国際写真サロン」開催。同展を特集した『アサヒカメラ臨時増刊・第7回国際写真サロン集世界写真傑作集』にはJCPC会員2名含む在米日本人の作品が6点掲載される ■JCPCが「ニッポニーズ・カメラ・ピクトリアリスト・オブ・カリフォルニア(Nipponese Camera Pictorialist of California)」(以下「NCPC」)に改名 ■10月21日-28日　NCPC展(福山秀治はこの年から参加)	■5月　木村伊兵衛、原弘、伊奈信男らが日本工房を脱退し「中央工房」を設立 ■名取洋之助が日本工房(第2次)を設立。10月『NIPPON』刊行。後に土門拳、藤本四八などの写真家、亀倉雄策などのグラフィック・デザイナーらが参加 ■11月27日～35年1月10日　野田英夫がホイットニー美術館で開催された「Second Biennial Exhibition of Contemporary American Painting」に出品
1935 昭和10	■1月　『日本写真年鑑　1934-35』昭和10年版の写真家一覧に写真関係者として下島勝信の名前が掲載 ■11月3日～10日　NCPC展。福山秀治出品。日本から福原信三、福原路草、下島勝信らも作品を出品 ■ハリー・K・シゲタ《Soak Pit》(挿図5)が「フォト・ピクトリアリスト・オブ・ミルウォーキー(Photo Pictorialists of Milwaukee)」の国際サロンに入選 ■下津佐正志《インプレッション》がロンドン写真サロン(London Salon of Photography)の展覧会に入選 ■『世界写真年鑑』1934-35年版に在米日本人写真家による作品が4点掲載される。アーサー・ケールズが寄稿文のなかで、サロンが変わりゆくなか、日本人のカメラクラブの展示はまだ見る価値があると記す	■ドロシア・ラングがFSAプロジェクトのためカリフォルニア海岸部と中西部の農村地帯の取材を始める(1939年まで)
1936 昭和11	■11月　全日本写真連盟主催「第8回国際写真サロン」開催。同展を特集した『アサヒカメラ臨時増刊・第8回国際写真サロン集世界写真傑作集』にはJCPC会員2名含む在米日本人の作品が7点掲載される ■11月1日～8日　NCPC展。福山秀治出品 ■アーサー・F・ケールズ死去 ■『世界写真年鑑』1936年版に在米日本人写真家による作品が1点掲載される(下島勝信の作品《Conversation》も掲載される)。ケールズが最後に寄稿した文章では、前年からサンフランシスコ周辺ではサロン活動が下火になったと伝える。理由として、小型カメラが普及し、アマチュア写真家の表現にも変化が起こっていることを挙げる。在米日本人の活動は、これまでほど盛んではないが、着実に技術をあげ、すばらしい作品を発表していると記す	■11月　『ライフ』創刊 ■ヴァルター・ベンヤミン『複製技術時代の芸術』発表
1937 昭和12	■NCPC展開催有無不明	■エドワード・ウェストンが写真家として初めてグッゲンハイム奨学金を授与される ■3月17日～4月18日　ニューヨーク近代美術館でボーモント・ニューホールによる展覧会「写真：1839-1937」開催
1938 昭和13	■11月　モホイ＝ナギの著書『The New Vision: Fundamentals of Design』にシゲミ・ウエダの《Oil Ditch》が掲載される ■NCPCが名称を再びJCPCに戻す ■11月6日～13日　JCPC展。福山秀治出品 ■12月　全日本写真連盟主催「第9回国際写真サロン」開催(在米日本人の入選未確認)	
1939 昭和14	■JCPC展開催有無不明	■第二次世界大戦勃発
1940 昭和15	■11月10日-17日　JCPC展(現在確認されている最後の展覧会)。福山秀治出品	■ニューヨーク近代美術館が写真部門を設置

年	JCPCおよびその周辺	社会、写真・美術界
1941 昭和16	■11月　全日本写真連盟主催「第10回国際写真サロン」開催。同展を特集した『アサヒカメラ編・第10回国際写真サロン集　世界写真傑作集』には在米日本人の作品が1点掲載される ■JCPC展開催有無不明	■12月　真珠湾攻撃
1942 昭和17	■1月　地元警察やFBIによるリトル・トーキョー近郊の在米日本人の家宅捜索が始まる。一方で、カメラ・ピクトリアリスト・オブ・ロサンゼルスによる第25回国際サロンにおいて吉良弘、進藤虎龍らの作品が入選・展示される ■2月　大統領行政命令9066（Executive Order 9066）が発布。在米日本人の排斥運動および強制収容所送還にともないJCPCの活動も終了 ■8月　およそ11万人の日本人・日系アメリカ人の各地への収容が完了したとされる	■ドロシア・ラングがグッゲンハイム奨学金を辞退し、戦時転住局（War Relocation Authority）の職員として在米日本人の強制収容所を取材する職に就く。マンザナー強制収容所などを取材 ■1月～3月　イサム・ノグチがカリフォルニアで「日系二世作家および芸術家の民主主義への動員」を組織。ニューヨークとワシントンD.C.で在米日本人強制移住の窮地を訴える ■5月　イサム・ノグチが志願してポストン戦争強制収容センターに入所（11月退所）。同センターには進藤虎龍、泉尾榮實、シゲミ・ウエダらがいた
1943 昭和18	■1月　カメラ・ピクトリアリスト・オブ・ロサンゼルスの第26回国際サロンにロサンゼルス・カウンティ美術館のコレクションから吉良弘の作品が展示される。このとき吉良はヒラ・リバー戦争移住センターにいた ■11月　エドワード・ウェストンがマンザナー強制収容所にいる宮武東洋に手紙を送る ■河野浅八が病気のため郷里で死去	■アンセル・アダムスがマンザナー強制収容所の取材を始める ■イサム・ノグチ、国吉康雄らが「民主主義のための日系二世芸術協議会」を結成
1944 昭和19	■ウェストンの働きかけを契機に宮武東洋がマンザナー強制収容所で写真スタジオを構える。同所にいた木村久雄が手伝う ■福山秀治がヒラ・リバー戦争移住センターで公式写真家として活動。また、同センターで佐多忠直が美術クラブを主宰し、写真展も開催したとされる	■アンセル・アダムスがマンザナー強制収容所に収容された日本人を取材した『Born Free and Equal : The Story of Loyal Japanese-Americans』刊行
1945 昭和20		■8月　広島、長崎への原爆投下 ■9月　第二次世界大戦終結



挿図4　エドワード・ウェストン《ペッパーNo.30》1930（昭和5）年（1981年プリント）、横浜美術館蔵

挿図5　ハリー・K・シゲタ《Soak Pit》1935（昭和10）年頃、横浜美術館蔵（トム・ジェイコブスン氏寄贈）

おわりに（今後の課題について）

1926（大正15／昭和元）年にリトル・トーキョーで結成されたJCPCは、1940（昭和15）年の日本人排斥運動までのおよそ15年間、非常に濃い密度で活動をおこなった。会員は月に1点の作品制作を期待され、会合を通してお互いの作品を講評しあったとされる[17]。JCPCの最初の10年間にあたる1926（大正15／昭和元）年から1935（昭和10）年は、年表の事項の多さもさることながら、巻末資料にまとめた『世界写真年鑑』や『国際写真サロン』での作品掲載数の多さからも、その熱量が伝わってくる。

デニス・リードによれば、河野浅八はJCPCの周辺にはいたものの、会員にはならず、展覧会にも一度も出品しなかった。しかしながら1920年代には、河野はすでにこの地域で名前の知られた写真家のひとりであった。河野は、佐多忠直と同じく岩田美術店[18]で働いており、旅行やキャンプが好きで、どこへ行くにもカメラを持ち歩いていたと記録される[19]。進藤虎龍や、初回のみ会員であった浅石清（Kiyoshi Asaishi）、シアトルからロサンゼルスに移住した吉良弘らとも親しく付き合っていた。リトル・トーキョー近郊を拠点とした写真家のなかでは、最も多くの場所で作品が展示されたひとりで、アメリカ、日本のみならず、ロンドン写真サロン（London Salon of Photography）や英国王立写真協会（Royal Photographic Society）、パリの国際写真サロン（Salon International d'Art Photographique de Paris）などに入選した経歴をもつ。

一方の福山秀治については、1934（昭和9）年にJCPC会員となり、1940（昭和15）年の最後の展覧会まで、現在確認されている限り毎回作品を出品した（1934-36年、1938年、1940年／計5回）。また、一番早い作例として、1931（昭和6）年の全日本写真連盟主催「第5回国際写真サロン」への入選作があることから、芸術写真家としての活動は少なくとも1931（昭和6）年から1940（昭和15）年の10年間におよぶといえる。

横浜美術館が所蔵する福山の作品《ミルク瓶のふた》（図版3）と「題名不詳」（図版4）は、プリントに年記がなく、撮影年不詳であるが、現在確認できた福山の一番早い活動歴と、本作旧所蔵者の荒木田船長が1935（昭和10）年のサンフランシスコ航路便・秩父丸でもって乗船履歴を終えていることから、1930～35（昭和5～10）年頃に撮影された写真として年代を絞りこめるかもしれない。補足すると、河野作品を含め、福山の写真がどのように荒木田船長の手に渡ったのか、詳細は不明である。しかしながら、同氏の旧蔵品で横浜美術館に寄託されている藤田嗣治の水彩画《マドレーヌ》（1933年）は、画中に「為船長／嗣治 Foujita 1933／madeleine」という書き込みがある。藤田は、1930（昭和5）年1月に横浜港から日本郵船の太洋丸でアメリカに向かい、1933（昭和8）年11月17日に秩父丸で当時の恋人マドレーヌと横浜港に帰港した。《マドレーヌ》は、荒木田が船長を務めていた秩父丸の船内で、藤田が贈ったものといえるだろう。この作品の来歴を鑑みると、荒木田の手元にあった美術作品は、船長時代に入手したものである可能性が高い。そのため、河野・福山の作品も、なんらかの経緯で荒木田が船長時代に写真家本人、あるいはその知人などから贈られたものと仮定したうえでの、撮影年代の絞り込みである。

また、本稿執筆時点までにさらに2点、福山の作品が確認できた。1934（昭和9）年の全日本写真連盟主催「第7回国際写真サロン」の入選作《浪》と、1936（昭和11）年の「第8回国際写真サロン」の入選作《かもめ》である[20]。この第7～8回国際写真サロンにおいて、福山は漢字名を「福山英春」としている。この漢字名の変更に関する詳細・経緯は不明である。本稿では最も早い作例の漢字を採用するが、この「英春」名は、推測の域を出ないが雅号であろうか。

河野、福山の作品を起点として、本年表を作成するまでに至ったが、この作業の過程でもうひとり、横浜美術館の収蔵作家であり、1920-40年代の在米日本人写真家として調査が望まれる作家が見えてきた。それは、JCPC会員ではなかったが、彼らが活動していた頃にカリフォルニア州サンディエゴで写真スタジオを経営していた下津佐正志(1885-1959)である。

下津佐は、日本の公立美術館では横浜美術館が唯一、作品を所蔵している写真家である。1905(明治38)年に渡米。ニューヨークの美術学校で学び、1908(明治41)年にロサンゼルスに移住した後、1915(大正4)年から1927(昭和2)年までサンディエゴにスタジオを構えた(427 East Street, San Diego, CA)。1927(昭和2)年頃に帰国し、東京でスタジオを開業。サロンに出品を続けながら、1934(昭和9)年には丸の内の日本劇場で上演されたアメリカの「マーカス・ショー」出演者らを撮影するなど、様々な方面で活躍した。JCPCの展覧会に出品したかは不明であるが、『Making Waves: Japanese American Photography, 1920-1940』カタログでは、個人蔵の作品1点とプロフィールが掲載されている。そのほか、『世界写真年鑑』において、サンディエゴ滞在期を含め3回にわたり作品が取り上げられている(1927年版、1928年版、1932年版)。また、当館所蔵作品《婦人》(挿図6)は、1927(昭和2)年シアトル・カメラ・クラブの展覧会に出品されていたことも改めて確認した[21]。現在、遺族の手元には下津佐の滞米期から帰国後の資料が残されており、その調査が望まれている。1920-40年代の在米日本人写真家たちに関する調査研究をおこなう上では、下津佐もまた重要な写真家である。

挿図6　下津佐正志《婦人》1927(昭和2)年、横浜美術館蔵

またもうひとり、年表のなかで登場するアメリカ人写真家マーガレット・マーザー(1886-1952)も、当時の在米日本人と白人写真家のコミュニティをつないだ人物として注目したい。マーザーは、孤児であり、娼婦であり、写真家であり、エドワード・ウェストンのみならず、男女問わず多くの恋人がいたとされる(挿図7、8)。リトル・トーキョーを頻繁に訪れていた1916(大正5)年頃のマーザーの作品には、日本傘を持った白人女性のモデルが写されている。彼女は、エドワード・ウェストンをカメラ・ピクトリアリスト・オブ・ロサンゼルスに招

挿図7　エドワード・ウェストン《マーガレット》1920(大正9)年(1981年プリント)、横浜美術館蔵

挿図8　イモージェン・カニンガム《エドワード・ウェストンとマーガレット・マーザー》1923(大正12)年(後年のプリント)、横浜美術館蔵

き入れたほか、1924(大正13)年に羅府新報主催のコンペティションで審査員を務めた。アメリカ国内でも、ベス・ゲイツ・ウォレン(Beth Gates Warren)の書籍『Artful Lives: Edward Weston, Margrethe Mather, and the Bohemians of Los Angeles』(J. Paul Getty Trust、2011年)の出版を契機に、再評価が進んでいる写真家でもある[22]。

そして最後に、今後の課題として挙げられるのが、実作の調査である。しかしながら、1920年代から40年代に活動した在米日本人写真家らの作品については、当館所蔵でも河野、福山、下津佐、シゲタの4作家32点と限られる。日本国内において、戦前の在米写真家らの作品はほとんど残されておらず、アメリカでもまた、第二次大戦中の日本人・日系アメリカ人排斥運動で多くが失われてしまった。アメリカ国内に残された作品・資料は、デニス・リードらによってまとめられており、こうした作品群にアクセスする必要がある。

デニス・リードは、1985(昭和60)年に在米日本人写真家らの歴史的位置づけについて、以下のように記している。

写真史においては、後年のピクトリアリズムは問題にもされず、せいぜいアマチュアのレベルに追いやられてしまうことが多い。確かにそうであったと言える。しかし、このムーブメントは、実に幅広く多様であったのだ。(中略)

在米日本人写真家たちは、ピクトリアリズムを自分たちなりに解釈していた。ピクトリアル写真のそもそもの多様性がここに現われており、彼らの表現にはアメリカン・ピクトリアリズムに沿ったものも、そして、非常に冒険的なものもあり、完全にピクトリアル・スタイルを踏襲したものも、そうでないものもあったのだった。[23]

おおざっぱに言えば、日本人の写真家たち(筆者註:戦前に日本国内で活動した写真家たち)*はみな両極端な二つのうちのどちらかに方向づけられていた。すなわち、モダン化から後退して回顧的ロマンティシズムの方向をとるか、あるいはモダン化を活かしながら積極的にその新しい形態を創造しようとするか、のどちらかであった。一方では、アメリカの日本人たちはこの極端な二つの間の中間になんとなく位置していた。彼らの最も大胆な者ですらピクトリアリズム運動の流れの内側で仕事をしていたのである。*[24]

ここでいうアメリカの日本人たちの表現の「多様性」や「極端な二つの間の中間になんとなく位置していた」という曖昧さは、確かに傑出した写真家をとりあげていく歴史の記述においては、扱いが難しいものであったかもしれない[25]。

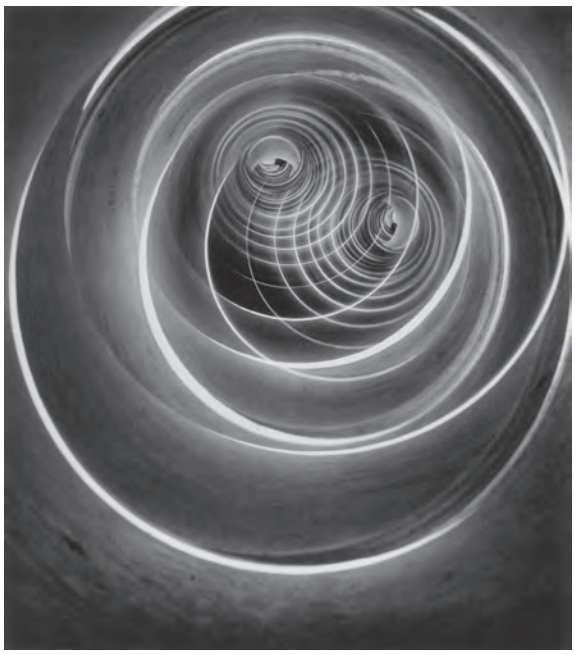
一方でリードは、在米日本人写真家らの作品の基調をなす傾向として、「カメラを下向きにする視点(a downward point of view)」「印象的な陰影と模様の表現(striking shadows and patterns)」「ドラマチックな曲線形態(a dramatic curving form)」「点景としての人物(figures as mere accents to the composition)」を挙げている[26]。また、1925(大正14)年頃には、カリフォルニアの日本人写真家らの多くがソフト・フォーカス・レンズを使用していなかったこと、また、フィルムをトリミングして部分を強調するモダニズム的ビジョンを提示する作品を制作していたことも伝えている[27]。こうした写真表現は、文字通り、サロン的なピクトリアリ

ズム運動のなかでモダニズムを志向するという、「両極端の方向の中間に位置していた」在米日本人写真家の特徴を体現するものといえるだろう。

また、本稿では詳しく述べないが、河野浅八の《絶えざる動き》(挿図9)や、シゲミ・ウエダ、中村憲太郎らが生み出した在米日本人写真家による抽象・半抽象の表現が、ピクトリアリズムにおける抽象を前進させただけでなく、ステレオタイプ化していたサロンを変えたとも、当時より指摘されている[28]。

こうした分析や言説を正確に把握し、理解するためにも、1920-40年代の在米日本人写真家らの実作調査と、当時の批評家らの言説確認が必要となる。筆者としては、今後も国内で確認できる作品・資料・文献調査を継続し、戦前にアメリカで活躍した日本人写真家に関する記述の蓄積に努めたい。

(横浜美術館学芸員)



挿図9　河野浅八《絶えざる動き》1931(昭和6)年、個人蔵(『Making Waves: Japanese American Photography, 1920-1940』p.111より引用)
同一イメージのプリントを宇城市不知火美術館、東京都写真美術館が所蔵

1　本稿で記す在米日本人写真家らの漢字名は、『国際写真サロン』カタログ(第1回～第5回、朝日新聞社、1927-31年)のなかで確認できたものを典拠としている。なお、後述の佐多忠直については『日本写真会会報　光と其諧調』第10巻3号(日本写真会、1931年3月1日)を典拠とする。漢字名が判明しなかった写真家については、カタカナで名・姓の順で記した。

2　後述するデニス・リードの研究によれば、河野の名前が最初に確認されるのは1924(大正13)年。羅府新報社主催の写真展に出品した《Evening Breeze》において副賞を受賞した際である。この写真は、アメリカ国内に個人蔵のものがあるが、同一イメージのプリントを宇城市不知火美術館も所蔵している。

3　河野の作品を所蔵する東京都写真美術館が収蔵時に作成した資料では、「指導したアマチュア写真家たちに楠田宗光、吉津良臣、雄川幸太郎、井上幾雄、大森元道らがおり、パリやロンドンのサロンの入賞経験者を生み出した。第二次世界大戦前、日本における海外の国際写真サロン入賞者の6割以上を熊本勢が占めるなど、戦前の写壇に大きな影響を与えた。」とある。

4　河野の概要については、宇城市不知火美術館のウェブサイトに記述がある。
https://kumamoto-museum.net/shiranuhi/archives/393(参照2021-12-27)

5　「Masumi Hayashi Photography: Family Album Project」
https://www.masumihayashi.com/html/famalbum.html(参照2021-12-27)
ハヤシは、1945(昭和20)年にフクヤマが収容されていたヒラ・リバー戦争移住センターで生まれた。戦後に全米各地の元日系人収容所や関係者を調査し、フクヤマを発見する。なお、ハヤシは2006(平成18)年に事故で亡くなった。

6　当館が所蔵する河野作品の裏面には、アメリカでの居住地を示すと思われる住所の記載がある。「A. Kono / 151 No. Chicago St / Los Angeles, Calif. / U.S.A.」。この住所は、リトル・トーキョー中心地区から東へ2km程度離れたエリアである。福山作品の裏面には、次の住所の記載がある。「Hideharu. Fukuyama / 307 E. First St. / Los Angeles Calif,(原文ママ)」。この住所は、現在では全米日系人博物館などが建ち並ぶエリアにあり、リトル・トーキョーの中心地区にあたる。

7　本稿で取り上げる「Japanese Camera Pictorialists of California」の日本語名については、デニス・リード『日本人写真家たちの航跡　Japanese Photography in AMERICA 1920-1940』(高野育郎、幸松菊子訳、JICC出版局、1986年)において「カリフォルニア・日本人カメラ・ピクトリアリスト(JCPOC)」(p.40)と記載されているが、本稿内では他のクラブとあわせて、英語表記の順に沿って「日本人カメラ・ピクトリアリスト・オブ・カリフォルニア」とし、略称をJCPCとした。

8　脚注7に記した文献は、デニス・リードが2016年以前に企画した在米日本人写真家に関する展覧会の日本巡回時のカタログ

である。残念ながら同書にも福山に関する記述はない。

9 本稿での作品名については、①作家存命中に書籍、雑誌、年鑑等に記載された日本語タイトルが確認できた場合はそれを優先した。次いで、②横浜美術館および東京都写真美術館で日本語タイトルが付されている場合はそれを採用した(一部修正したものもある)。①②いずれにもあてはまらない作品は英語タイトルのみ記載した。

10 「University of Washington Libraries: Digital Collections」
https://digitalcollections.lib.washington.edu/digital/collection/hupy/id/6929/rec/1(参照2021-12-27)
この「Kyo Koike Photograph Collection」については、現在京都工芸繊維大学大学院博士後期課程在学/京都市立芸術大学非常勤講師の芦髙郁子氏が、シアトル・カメラ・クラブに所属した写真家福光太郎に関する調査をまとめた「福光太郎調査報告」(『東京都写真美術館 紀要』No.17、2018年)のなかで言及している。シアトル・カメラ・クラブの概要については同氏の調査報告のなかで分かりやすくまとめられている。このほか、本稿を書くにあたり、多くの点で同氏の報告を参考にした。ここに記して感謝を申し上げる。以下、東京都写真美術館ウェブサイトを参照。
https://www.topmuseum.jp/contents/images/info/journal/kiyou_17/03.pdf(参照2021-12-27)

11 本年表の時期に『世界写真年鑑(Photograms of the Year)』(Iliffe & Sons Limited)に掲載された在米日本人写真家の作品リストは文末の資料にまとめた。

12 1924(大正13)年に発行された『アートグラム』は、『Making Waves: Japanese American Photography, 1920-1940』p.14に書影が掲載されている。その表紙には日本語で「アートグラム/1924」とある。本稿ではそれを典拠に、同誌はカタカナで表記した。なお、リードによれば、『アートグラム』は1924(大正13)年と1926(大正15/昭和元)年に発行されている。

13 A racial bent for decoration leads the Japanese photographers to select arrangements that are not pictorial in our sense of the word, but queer rather. The "Snow Flower" (XII) by E. Tankai Suzuki, is the kind of things that would be interesting to an observant nature-lover; but how many of us would think it worth a plate and a print? The print above it (XII) by K. Sugimoto, called "Autumn," adds another factor to mere decoration in the shape of effective aerial prospective. Its tone variations are engaging also. The print therefore makes some appeal to the Western mind.
F. C. Tilney, "Pictorial Photography in 1924," *Photograms of the Year, 1924*, Iliffe & Sons Limited, p.7

14 Photographic Art was imported from the West, but there is no reason we must swallow it whole. We are old enough to digest it. Moreover, why can we not make the taste good according to our own cooking method?"
Dr. K. Koike, "Japanese Art in Photography," *Camera Craft,* vol. XXXII, no. 3, March, 1925, p.110.(Dennis Reed, *Making Waves: Japanese American Photography, 1920-1940,* Japanese American National Museum, p.29より引用)

15 本年表の時期に『国際写真サロン』関連書籍・雑誌(朝日新聞社)に掲載された在米日本人写真家の作品リストは文末の資料にまとめた。

16 「各國のサロンに入選實に數百回 熊本縣松合町出身の河野淺八氏作品展」『九州日日新聞』1934(昭和9)年5月20日

17 Reed, *Making Waves,* p.17

18 岩田美術店は、岩田タマサブロウ(Tamasaburo Iwata)が経営した店で、カメラや写真の資機材を販売していた(256 East First Street, Los Angeles, Calif.)。リトル・トーキョー近郊で活動する写真家らの交流や打ち合わせ場所になったほか、河野、佐多、吉良などはこの店の道具を借りて写真をプリントしていたとされる。また、彼らはほかの写真家からフィルム現像なども依頼され、岩田美術店の道具や設備を使って対応していたという。

19 Reed, *Making Waves,* p.144-145

20 《浪》;『アサヒカメラ臨時増刊・第7回国際写真サロン集 世界写真傑作集』朝日新聞社、1934年、ページ番号なし(作品番号250)
《かもめ》;『アサヒカメラ臨時増刊・第8回国際写真サロン集 世界写真傑作集』朝日新聞社、1936年、ページ番号なし(作品番号142)

21 作品に付属しているサロン出品票には以下の記載がある。
「Seattle Camera Club/(ロゴ)/The Third Annual International Exhibition of Pictorial Photography 1927/Accepted and Hung/Catalogue No. 95」

22 マーザーの名称については、日本で定まったカタカナ表記がなく、当館でもウェストンの作品では「マルグレーテ」、カニンガムの作品では「マルグレート・マザー」と表記されていた。そこで本稿では、ベス・ゲイツ・ウォレンのレクチャーを参照し、マーガレット・マーザーと表記することにした。以下、ロサンゼルス公共図書館(Los Angeles Public Library)の動画を参照。
https://vimeo.com/76439163(参照2021-12-27)

23 リード著、高野・幸松訳、前掲書、p.16

24 リード著、高野・幸松訳、前掲書、p.60

25 『日本写真全集2　芸術写真の系譜』では、「ピクトリアリズムは、結局のところ、大衆運動であり、人数の多さのみがその強みであった」(p.137)とも記される。

26 Reed, *Making Waves,* p.17

27 リード著、高野・幸松訳、前掲書、p.50

28 It is becoming an acceptable belief that American Japanese are not only advancing in abstract pictorialism but are impressing something national, something decidedly characteristic upon our art and in certain cases are transforming the stereotypical Salon.
Sigismund Blumann, "Our Japanese Brother Artists," *Camera Craft,* vol. XXXII, no. 3, March, 1925, p.109.(Reed, *Making Waves,* p.51より引用)

【資料】

『世界写真年鑑(Photograms of the Year)』(Iliffe & Sons Limited)および全日本写真連盟主催『国際写真サロン』関連書籍・雑誌(朝日新聞社)に掲載された在米日本人写真家の作品リスト

凡例：

- 2021年12月現在までに筆者が実際に確認した範囲を記載。
- 資料内にページ番号がないものは作品番号(Plate. または No.)を記した。

- 『世界写真年鑑』1921年版

  Taizo Kato (Los Angeles), *Sunlight and Shadow,* Plate. XLI

- 『世界写真年鑑』1923年版

  G. S. Akasu (Skampscott), *No-tan Japanesque,* Plate. VII

  F. J. Ogasawara (Portland), *A Portrait of Mrs. B,* Plate. XXXVI

- 『世界写真年鑑』1925年版

  Kaye Shimojima (Los Angeles), *Design Japonica,* Plate. XVI

- 『世界写真年鑑』1926年版

  H. Mayeda (California), *Design,* Plate. XXVII

  S. K. Katsu (Los Angeles), *Water,* Plate. XXVII

  T. Miyatake (Los Angeles), *Torioi,* Plate. XXIX

  H. Miyamoto (Los Angeles), *Line Study,* Plate. XLII

  K. Ota (California), *The Vine,* Plate. XLVIII

  K. Asaishi (Los Angeles), *Jars,* Plate. XLIX

• 『世界写真年鑑』1927年版

H. Onishi (Seattle), *Silver and Glass,* Plate. IV

K. Nakamura (California), *Evening Waves,* Plate. V

M. Shimatsusa (California), *Aurora,* Plate. XV(挿図10)
原文ママ

P. Y. Homma (Los Angeles), *Finding Shadows,* Plate. XX

K. Tanaka (Los Angeles), *Water Lily,* Plate. XXI

Takeshi Kimura (Los Angeles), *The Green Beam,* Plate. XXI

S. Uyeda (California), *Oil Dith,* Plate. XXXIII

T. K. Shindo (Los Angeles), *Nigasa,* Plate. XLVII
原文ママ

K. Asaishi (Los Angeles), *Lines and Angles,* Plate. XLVII

挿図10　下津佐正志《オーロラ》1927(昭和2)年頃、横浜美術館蔵

• 『世界写真年鑑』1928年版

A. Furukawa (Hawaii), *Her Trinkets,* Plate. XXII

T. K. Shindo (Los Angeles), *Still Life,* Plate. XXII

A. Kono (Los Angeles), *Summer Time,* Plate. XXVI(同一イメージのプリントを宇城市不知火美術館が所蔵)

T. Mayeda (Los Angeles), *Design Study,* Plate. XXVIII

T. K. Tsukane (San Francisco), *Serpentine and Dado.* Plate. XXX

H. Kira (Los Angeles), *Phials,* Plate. XXXIV

K. Ota (California), *Wire,* Plate. XXXIV

H. Onishi (Seattle), *In the Danger Zone,* Plate. XLI

K. Ohara (Los Angeles), *The Harbour,* Plate. XLVI

＊下津佐正志の作品《The Shadow》(Plate. XXIX)も掲載されている。活動地はJapan。

• 『世界写真年鑑』1929年版

K. Nakamura (Los Angeles), *Breaking Wave,* Plate. XV

T. K. Shindo (Los Angeles), *Summer Emotion,* Plate. XVIII

Hiromu Kira (California), *An Arrangement,* Plate. XIX

Kichiji Ohara (Los Angeles), *Evening Shadows,* Plate. XXIX

T. Maeda (California), *Whirlpool of Oil Bubbles,* Plate. XXXII

Satsuma Nakagawa (Los Angeles), *Departure,* Plate. XL

• 『世界写真年鑑』1930年版

Hiromu Kira (Los Angeles), *Curves,* Plate. XXII

R. M. Yaginuma (Los Angeles), *Still Life,* Plate. XXIII

R. Morita (Seattle), *Twilight Pattern,* Plate. XXXVIII

＊進藤虎龍の作品《Still Life》(Plate. XLVI)が掲載されているが活動地はJapanになっている。

• 『世界写真年鑑』1931年版

T. K. Shindo (Los Angeles), *The Shadow,* Plate. II

A. Kono (Los Angeles), *Pond Fantasy,* Plate. XII(同一イメージのプリントを宇城市不知火美術館、東京都写真美術館が所蔵)

T. Nihora (San Francisco), *Japanese Jar,* Plate. XIV

H. E. Kimura (Los Angeles), *The Aviator,* Plate. XXI

Rinzo Oshima (U.S.A.), *The Daybreak,* Plate. XXI

• 『世界写真年鑑』1932年版

T. Mayeda (Los Angeles), *Design,* Plate. III

R. M. Yaginuma (California), *Repose,* Plate. IV

T. K. Shindo (Los Angeles), *Oil and Water,* Plate. XXV

K. Nakamura (California), *The Dancer,* Plate. XXXIV

＊下津佐正志の作品《The Bat》(Plate. XXIII)も掲載されている。活動地はJapan。

• 『世界写真年鑑』1933年版

S. Izumi (California), *The Shadow,* Plate. XXVII

T. K. Shindo (Los Angeles), *Dragon-fly,* Plate. LI

• 『世界写真年鑑』1934-35年版

S. Tada (Cape Town), *Wandering in Fairyland,* Plate. XXVIII

S. Nakagawa (Los Angeles), *Light on the Street,* Plate. XLIV

K. Matsuki (Washington), *Water,* Plate. XLVII

T. K. Shindo (Los Angeles), *Bowman,* Plate. LV

• 『世界写真年鑑』1936年版

K. Wakasa (San Francisco), *Higasa,* Plate. L

• 『第1回国際写真サロン』1928年

小池晩人《日光の戯れ》／Dr. K. Koike, *Playing Sunlight,* p.96

ヒデオ・オーニシ《銀と瑠璃》／Hideo Onishi, *Silver and Glass,* p.101

多田茂《水の精》／S. Tada, *Mizu No Sei,* p.104

角南荘一《ウオルター・キイスミラー》／Soichi Sunami, *Walter Kethmiller,* p.107

丹下榮次郎《夢の郷》／Geo. Y. Tange, *Dream Vision,* p.108

守永章男《港》／Yukio (原文ママ) Morinaga, *In the Harbor,* p.111

國重淺吉《隠退》／F. A. Kunishige, *Retreat,* p.113

漆間鶴依《カーテンの前》／T. H. Uruma, *Front of the Curtain,* p.114

大原吉二《静物》／Kichiji Ohara, *Still Life,* p.117

エス・ナガクラ《海に働くもの》／S. Nagakura, *Toilers of the Sea,* p.121

仙田壽之吉《影》／Junokichi Senda, *Shadow,* p.164

橋本洋《海邊》／Yo Hashimoto, *Seashore,* p.165

古川章《輪轉機》／Sho Furukawa, *Rotary Printing Machine,* p.166（原文ママ）

井村新一《勝利》／Shinichi Imura, *Victory,* p.167

- 『第2回国際写真サロン』1927年

國分巳之太郎《吾等の村》／M. Kokubun, *Our Village,* p.60

中川奏《屋根》／Susumu Nakagawa, *Three Roofs,* p.61

加藤金重《階段》／Kaneshige Kato, *The Stair Way,* p.70

菅原鎮雄《光と影》／Sidzuo Sugahara, *Light and Shadow,* p.71

板野利藻《落陽》／Riso Itano, *Setting Sun,* p.72

泉尾榮實《朝の光》／Shigemi Izuo, *Morning Light,* p.78

古川章《静物》／Akira Furukawa, *Still Life,* p.79

勝清三《光と集合》／S. K. Katsu, *Light and Mass,* p.83

下島勝信《顔習作》／Kaye Shimojima, *Head Study,* p.85

大原吉次《或る夏の日》／Kichiji Ohara, *One Summer Day,* p.86

木村久雄《停車場》／Hisao E. Kimura, *Railway Station,* p.87

古屋富久《驟雨の後》／Tomihisa Furuya, *After Shower,* p.89

漆間鶴依《地球》／T. H. Uruma, *The Earth,* p.90

向井ティー《光と影》／T. Mukai, *Shade and Light,* p.94

本間萬《かもめ》／P. Y. Homma, *Sea Gulls,* p.95

小池恭《春の日暮れ》／Kyo Koike, *Late in Spring Day,* p.98

高木銀次郎《ポートレート》／Ginjiro Takagi, *Portrait,* p.100

淺石清《書籍》／Kiyoshi Asaishi, *Books,* p.102

- 『第3回国際写真サロン』1929年

河野淺八《平和な村》／S. Kawano, *Peaceful Village,* p.155（同一イメージのプリントを宇城市不知火美術館、東京都写真美術館が所蔵）（原文ママ）

古屋富久《或る朝》／T. Furuya, *A Morning,* p.156

古川章《荷》／A. Furukawa, *The Cargoes,* p.159

國分巳之太郎《日暮れ時》／M. Kokubun, *Evening,* p.160

木村久雄《残照》／H. Kimura, *Last Light of Day,* p.161

松木楠寅《キング街驛》／K. Matsuki, *King St. Station,* p.166

本間萬《風景》／Y. Homma, *Landscape,* p.170

板野利藻《駅雨》／R. Itano, *Pigeon in Storm,* p.171

中村憲太郎《嵐の後》／K. Nakamura, *After the Storm,* p.174

中川奏《渚の木》／S. Nakagawa, *Seaside Trees,* p.175

アイ・ケイ・田中《かもめ》／I. K. Tanaka, *Sea Gull,* p.178

山岸貞造《浪》／T. Yamagishi, *Wave,* p.179

小林貞樹《ベニス》／S. Kobayashi, *Venice,* p.183

進藤虎龍《静物》／T. Sindo, *Still Life,* p.186

吉良弘《習作（紙細工）》／H. Kira, *Study-paper Work,* p.187

八木沼宗清《堰》／M. Yaginuma, *Dam,* p.188

大原吉次《朝の影》／K. Ohara, *Morning Shadow,* p.189

安原宏《鋪道》／H. Yasuhara, *Promenade,* p.192

小池恭《一本松》／Dr. K. Koike, *Lonely Pine Tree,* p.195

- 『第4回国際写真サロン』1930年

小林貞樹《空》／Sadaki Kobayashi, *The Sky,* p.175

齋藤文一《マック氏の像》／Bunichi Saito, *Portrait of P. Mac,* p.179

國分巳之太郎《影》／Minotaro Kokubun, *Light Shade,* p.181

八木沼宗清《待ち》／M. Yaginuma, *Waiting,* p.190

中川憲太郎《丘上の木》／Kentaro Nakagawa, *Trees on the Hill,* p.194

小池恭《郊外》／Dr. Kyo Koike, *In the Suburb,* p.194

吉良弘《夜の地下道》／Hiromu Kira, *Subway at Night,* p.196

板野利藻《崖下》／Riso Itano, *Hill Side,* p.200

松木楠寅《可愛い連合ひ》／Kusutora Mutsuki（原文ママ）, *A Little Couple,* p.201

進藤虎龍《雪解け》／Koryu Simdo（原文ママ）, *Snow Breaks,* p.205

中川奏《山の手の驛》／Susumu Nakagawa, *Hill Side,* p.208

太田粂藏《雨後》／Kumezo Ota, *After the Rain,* p.208

河野淺八《小波》／Asahachi Kono, *Ebb-tide,* p.216（同一イメージのプリントを宇城市不知火美術館が所蔵）

- 『第5回国際写真サロン』1931年

進藤虎龍《模様》／T. K. Sindo, *Pattern,* p.167

エヌ・松本《果物籠》／N. Matsumoto, *The Fruit Basket,* p.167

エッチ・ケー・繁田（原文ママ）《構成》／H. K. Shigeta, *Composition,* p.169

小林貞樹《海に遊ぶ》／Teiju Kobayashi, *Playing with the Sea,* p.172

柑本吉次《引汐》／Kichiji Kojimoto, *Eddies,* p.173

板野利藻《波》／Riso Itano, *Wave,* p.178

エス・クリタ《壁上の影》／S. Kurita, *Shadow on the Wall,* p.188

福山秀治《歸家》／Hideharu Fukuyama, *Coming Home,* p.189

河野淺八《絶えざる動き》／Asahachi Kono, *Perpetual Motion,* p.194（同一イメージのプリントを宇城市不知火美術館、東京都写真美術館が所蔵）

和泉新作《トンネルの夜》／Shinsaku Izumi, *Tunnel at Night,* p.195

松木楠寅《讀書》／Kusutora Matsuki, *Pleasure of the Reading,* p.196

中川奏《朝の光》／Susumu Nakagawa, *Morning Light,* p.201

前田寅二《砂漠》／Toraji Maeda, *The Desert,* p.209

貝居次郎《反映》／Jiro Kaii, *Reflection,* p.216

- 『アサヒカメラ臨時増刊・第7回国際写真サロン集　世界写真傑作集』1934年

古川勝三郎《砂の交響楽》／K. Furukawa, *Sand Symphony,* no.109

松本延榮《静物》／M. Matsumoto, *Still Life,* no.124

K. 太田《階段》／K. Ota, *Stairway,* no.144

小林貞樹《おう寒う》／T. Kobayashi, *Oh Yee Cold,* no.193

K. 松木《水》／K. Matsuki, *Water,* no.224

福山英春《浪》／H. Fukuyama, *Wave,* no.250

- 『アサヒカメラ臨時増刊・第8回国際写真サロン集　世界写真傑作集』1936年

小池晩人《春の河》／K. Koike, *River in Spring,* no.118

小路本吉次《仔猫》／K. Kojimoto, *Kittens,* no.140

福山英春《かもめ》／H. Fukuyama, *Life in The Sky,* no.142

H. Y. 林田《泡》／H. Y. Hayashida, *Water Bubbles,* no.163

貝居次郎《愛猫》／J. Kai, *Our Pet,* no.183

松木楠寅《曇れる日の出》／K. Matsuki, *Sunrise of Unsettled Day,* no.186

若狭一夫《カバリエロ》／K. Wakasa, *Covalliero,* no.189

- 『アサヒカメラ編・第10回国際写真サロン集　世界写真傑作集』1940年

貝居次郎《獵人達》／J. Kai, *Hunters,* no.66

Research Notes
Basic Research on U.S.-resident Japanese Photographers in the 1920s-1940s : An Outline and Chronology of the Japanese Camera Pictorialists of California

Osawa Sayoko
(Assistant Curator, Yokohama Museum of Art)

In this paper, I examine the works of two individuals who produced art photographs after immigrating to the U.S. West Coast, where they moved prior to World War II. My choice of subject was triggered by the fact that the Yokohama Museum of Art received a gift of these artists' works in fiscal 2018. The first photographer was Kono Asahachi (1876-1943), and the second was Fukuyama Hideharu (1905-1978). Both artists' works were contained in the collection of Arakida Yoshiaki, the captain of the *Chichibu-maru* and other cargo and passenger ships that were retained by the Nippon Yusen company for service on the Yokohama to San Francisco line.

After the works were added to the museum collection, I began focusing on Kono and Fukuyama, and while conducting prior research in both Japan and abroad, I discovered some similarities between the two. First, Kono and Fukuyama both lived in the Little Tokyo neighborhood of Los Angeles. The two were also active on the periphery of the Japanese Camera Pictorialists of California, a Japanese photographers' club that was formed in the same neighborhood. As for the latter, I found information on Kono and identified Fukuyama in a group photo of the club in the catalogue for *Making Waves: Japanese American Photography, 1920-1940,* an exhibition held at the Japanese American National Museum in Los Angeles in 2016. As a result, in this paper I made a chronology and outline to give a general overview of trends in the Japanese Camera Pictorialists of California (based on Dennis Reed's studies published in the catalogue), and provide basic information on Kono and Fukuyama.

In addition, although Kono is fairly well known due to his activities in international photo salons, Fukuyama's activities remain largely unknown. Based solely on my research prior to the writing of this paper, the earliest mention I found of Fukuyama was in 1931. The name "Fukuyama Hideharu" (rendered in kanji) is listed as the creator of a winning work titled *Coming Home* in the catalogue for The Fifth International Photographic Salon of Japan, which was organized The All-Japan Association of Photographic Societies. I also discovered that two of Fukuyama's other works were selected for inclusion in the seventh and eighth editions of the salon (organized by the same group), and found a picture of Fukuyama in a 1937 group photo of the Seattle Camera Club that is contained in the Kyo Koike Photograph Collection, located in the University of Washington Libraries.

In addition to enumerating the points listed above, in this paper, I discuss the need to continue my research on Kono and Fukuyama in the future as well as the importance of searching for the artists' actual works in the U.S. and Japan, as well as researching Shimozusa (aka Shimotsusa) Masashi, who ran a photo studio in San Diego, California before the war, and whose works are also represented in the Yokohama Museum of Art Collection.